

「第30期世田谷区社会教育委員の会議」の活動報告について

1 主旨

区教育委員会は、社会教育法及び区条例により社会教育委員を設置し、社会教育に関する区の取組みについて意見をいただいている。このたび「第30期世田谷区社会教育委員の会議」から、2年間の活動報告書が提出されたので報告する。

2 社会教育委員

10名（学識経験者・学校教育及び社会教育の関係者・家庭教育の向上に資する活動を行う者）

3 任期（第30期）

令和4年6月1日～令和6年5月31日（1期2年）

4 第30期のテーマ及び選定理由

テーマ：「地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりと検証」

理由：第30期は、地域と学校の新たな連携・協働のより一層の実現に向け、実践的なモデルを抽出し、モデルの試行と検証を通じて地域のさらなる活性化につなげていくために、「地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりと検証」について調査研究等を行った。

5 活動内容

全12回

- 第1回 委嘱状交付、諮問の検討、活動紹介
- 第2回 グループワークⅠ～持続可能な活動とは～
- 第3回 グループワークⅡ～持続可能な活動とは～
- 第4回 グループワークの振り返り
- 第5回 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅰ～より連携・協働するためには何が必要か～①子ども食堂、②おやじの会
- 第6回 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ～より連携・協働するためには何が必要か～③総合型地域スポーツ・文化クラブ、④子どもぶんか村
- 第7回 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅲ～活動計画案作成①～
- 第8回 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅳ～活動計画案作成②～
- 第9回 実践的連携・協働活動の報告Ⅰ
- 第10回 実践的連携・協働活動の報告Ⅱ
- 第11回 活動報告書案の検討について
- 第12回 活動報告書のまとめ

6 報告書

別添「第30期世田谷区社会教育委員の会議活動報告書」のとおり

第30期世田谷区社会教育委員の会議報告書
―地域資源活用型連携・協働モデルの可能性と課題―

令和6年3月25日

世田谷区社会教育委員の会議

目次

はじめに	1
第1章 地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりの検討	2
1 背景	
(1) 区の動向	
(2) 第29期社会教育委員の会議の概要	
(3) 諮問事項	
2 検討目的	
3 検討方法	
(1) 活動するうえで大事にしているもの	3
第2章 地域資源活用型連携・協働モデルの試行的実践	7
1 連携・協働モデルの試行的実践の概要	
2 連携・協働モデルの試行的実践例	
(1) おやつ配布と無料学習塾「プレミ」	
(2) 校内居場所カフェ	8
(3) おやじの会	12
(4) 東深沢カフェ（仮称）	15
第3章 地域資源活用型連携・協働モデルの研究成果の検証	16
1 居場所となり得る空間（場）の提供	
2 持続可能な活動に欠かせない地域人材の存在	17
3 地域と学校の新たな連携・協働のあり方	18
4 まとめ	20
おわりに	21
資料	23
□ 資料1 第29期社会教育委員の会議活動報告書（概要）	
□ 資料2 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅰ検討事項シートまとめ	24
□ 資料3 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ検討事項シートまとめ	25
□ 資料4 実践的連携・協働に向けた活動計画案	26
□ 資料5 会議の活動経過（第1回～第12回）	30
□ 資料6 第30期社会教育委員の会議員名簿	31

はじめに

教育委員会では、第2次世田谷区教育ビジョンの基本的な考え方として、「一人一人の多様な個性・能力を伸ばし、社会をたくましく生き抜く力を、学校・家庭・地域が連携してはぐくむ」を推進している。

また、この基本的な考え方に基づいて、世田谷区では学校選択制を採らず、長年にわたって地域と一体となり、地域の様々な教育力を活用した「地域とともに子どもを育てる教育」を実践しており、教育に関する家庭や地域の声に応えていくためには、学校がより地域に開かれ、家庭や地域に学校運営や教育活動への参画を積極的に求めて、地域と一体となって豊かな教育の場をつくりだしていくことが必要であるとしている。

区内における地域と学校の連携・協働のしくみとしては、地域運営学校や学校支援地域本部のほかに、子どもぶんか村、おやまちプロジェクト、総合型地域スポーツ・文化クラブなど様々な形態がある。

このような中、第29期社会教育委員の会議では、新型コロナウイルス感染症の影響により、開始時期の遅れや度重なる会議日程の延長などを乗り越え、「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」をテーマに、区内の様々な事例等から連携・協働する背景や課題等を検証し、新たな連携・協働のしくみづくりに向けて提言された。

上記のようなことを踏まえ、第30期社会教育委員の会議（令和4年6月～令和6年5月）では、教育委員会より、第29期社会教育委員の会議を継承し、地域と学校の新たな連携・協働のより一層の実現に向け、実践的なモデルを抽出し、モデルの試行と検証を通じて地域のさらなる活性化につなげていくために、「地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりと検証」を諮問された。

本報告書は、地域資源活用型連携・協働モデルの可能性と課題を整理したものであり、今後の連携・協働活動の一助となれば幸いである。

第1章 地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりの検討

1 背景

(1) 区の動向

第2次世田谷区教育ビジョン調整計画では、基本的な考え方として「一人一人の多様な個性・能力を伸ばし、社会をたくましく生き抜く力を、学校・家庭・地域が連携してはぐくむ」とし、基本方針では「地域とともに子どもを育てる教育の推進」を掲げている。

また、世田谷区の子どもたちが、予測できない社会を生き、未知の世界を切り拓く力をはぐくんでいくためには、「学校での学び」に加え、家庭、地域、区内の大学等とともに連携・協働することが一層重要であるとしている。

(2) 第29期社会教育委員の会議の概要

諮問テーマを「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」とし、区内の様々な事例等から連携・協働する背景や課題等を検証し、新たな連携・協働のしくみづくりに向けて提言された。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、開始時期の遅れに伴い、予定していた会議ができなくなるなど、新たな連携・協働のしくみの具現化までには至らなかった（「第29期社会教育委員の会議報告書（概要）」は資料の20ページを参照）

(3) 諮問事項

第30期社会教育委員の会議第1回定例会において、区の動向や第29期社会教育委員の会議の報告書を踏まえ、教育委員会より「地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりと検証」について諮問を受けた。

2 検討目的

諮問の目的は、地域と学校の新たな連携・協働のより一層の実現に向け、実践的なモデルの試行と検証を通じて地域のさらなる活性化につなげていくことである。そのためには、新たな連携・協働の活動に相応しい取り組みを実践しかつ継続的に行うためには、どんなことが必要なのかを検討することに主眼を置いた。

3 検討方法

選定団体は、社会教育委員の会議のメンバーである4人の委員が所属する団体とし、2回のグループワークを通して、各団体の活動が「なぜうまくいっているのか」「いな

いのか」、「持続可能な活動にするために必要なもの何か」について意見交換をした。また、この意見交換をもとに、各委員が活動するうえで大事にしていることは何かなどを確認し、以下のようにまとめた。

(1) 活動するうえで大事にしているもの

【子ども食堂】

○個人発意型

○きっかけ

- ・地域活動している方からの誘い、子どもたちを介した親のつながり。
- ・コアなメンバーがいて新規募集を予定していなかったが、料理を作る人がいなく声を掛けられる。
- ・この地域に貧困で食べられない子どもがいるのかという疑問から始まった。

○活動を通して

- ・経済的貧困から関係性の貧困に気づき、心が満たされる活動をメインに変更。
- ・子ども自身に力をつけさせたいという気持ちが芽生え、新たな活動を立ち上げる。

〔現在の子ども食堂〕

○なんとなく、ふわふわと人が集まった

- ・料理をやりたい人、早期退職者など。
- ・スタッフが同じ空間で何回か重ねるうちに、問題が出てきても少しずつクリアになっていく。
- ・代表であってもこうしなさいということではなく、意見を聞きながら話しやすい雰囲気をつくっている。

○会員制、登録制

- ・誰でもどうぞというよりは、何らかの必要性がある子どもを対象。
- ・子どもたちも課題とか必要性を持った様々なタイプの子が集まる。
- ・「何らか」は当事者である子どもが決めるため、課題解決ではなく、その気持ちに寄り添えることを原則としている。

【子どもぶんか村】

○船橋地区委員会の事業として運営

○地区委員会には毎年P T Aから選出された方々が加わる（貴重）

・P T Aと学校のつながりが強いので、一緒に学校ともつながりが強くなっている。

・P T Aが活動に加わることで、学校にかかわったり様々な活動をする人たちがいて、その時の活動が生きてくる。

○目的

・ 地域、学校、家庭が連携して地域の教育力を担う。

○学校との関係（ハードルが高い）

・管理職以外は関心がない

・先生の研修（検討）⇒応援団になるために（距離感を縮めたい）

・先生が地域にかかわってくれたらうれしいが、地域の団体として強く求めているわけではない。

・先生も自分の地域に戻れば、地域の人として協力することが大事。

・ 地域づくりを応援していると、子どもや親たちに伝えて欲しい。

○N P O設立：ぶんか村プレイス

・ぶんか村に入ってこられない(情報からこぼれ落ちる)子どもたちがいることに気づいた。

・食支援、学習支援、子育て支援（3本柱）

【おやじの会】

○おやじの会—会社組織ではない空間

・地域でつながる最大のチャンス

・気持ちのよい意見を出し合い、主体的にやる組織

・やりたいことができる（枠にはめない）⇒何とかしよう⇒解決に向けた話し合い⇒イベントの企画運営⇒やってよかった（達成感）

※みんな（会員）を掻き立てる原動力になっている。

○学校と地域のかかわり

・学校側—多忙、かかわりにくい

○PTA

・学校間の保護者同士のつながりしかない

・子どもが卒業するとバラバラになる

○人とのつながり

・同じ学校に通う子どもの親としてのつながり

・PTA活動を通じて汗かいたり喜んだりしてつながる

・決まり事のない、上下関係のない、会社では得られない達成感を感じられる場

・嫌なことがあれば「スケジュールが合わない」と言えば角が立たず、参加しないことができるので、自由参加という緩さが大事。

・子どもの卒業を機につながりがなくなる

○他の団体（組織）

・非常に縦割りの組織（従来ダメだったので変えることが認められない、ロジックが通らなくなる）

【総合型地域スポーツクラブ】

○目的

・ 地域の核としての学校施設資源および人的資源を活用して、スポーツ・文化活動を通じた地域の一体感を構築する試み

○参加する動機

・ 安い、近い、情報

○組織化⇒持続（可能）化

- ・ デメリット：会長など固定化されと弊害が生じる
- ・ 形式的な代表制であり、権威的な上下関係はない

○学校施設開放との違い

- ・ 単一の種目ではなく複数の種目が組織化

○世田谷のよさ

- ・ 地域資源

○災害

- ・ 学校避難所
- ・ 避難所に対する地域の関心と学校の対応
- ・ 日常の顔見知りの関係が避難訓練
- ・ ルールの共有化
- ・ 日ごろからの地域と学校の関係次第で被害度が異なる

○課題

- ・ 部活動との関係

第2章 地域資源活用型連携・協働モデルの試行的実践

1 連携・協働モデルの試行的実践の概要

地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりの検討を踏まえ、令和5年5月から11月までの期間の中で、以下の活動を実践的連携・協働活動のモデルとして試行的に実践した。

- おやつ配布と無料学習塾「プレミ」
- 校内居場所カフェ
- おやじの会（東深沢小学校、駒繫小学校）
- 東深沢カフェ（仮称）

2 連携・協働モデルの試行的実践例

(1) おやつ配布と無料学習塾「プレミ」

①取り組み内容

コロナ禍において様々な報道から知る世界のことではなく、身近なところで起きていると実感する中で、支援を必要としている子どもに出会うチャンスを探した結果、おやつを配るだけなら時間はかからないが大事な「たった30秒の出会い」で済むのではないかと考え、おやつステーションと無料学習塾「プレミ」を令和3年11月に始めることになった。新たな動を始めるにあたり、令和4年7月に船橋地区委員会の理事の有志によってNPO法人世田谷ぶんか村PLACEを設立するに至った。

②活動内容

- 1) 時間帯：週2回、午後3時半～午後5時15分
- 2) 場所：旧世田谷福祉専門学校
- 3) 運営：おやつステーション（青少年船橋地区委員会）

無料学習塾「プレミ」（NPO 法人世田谷ぶんか村 PLACE）

（元高校校長・教員、元小学校教員）

おやつステーションで声掛けした子どもたちの居場所として、無料学習塾「プレミ」を開催。

- 4) 資金：世田谷区子どもの学び運営スタートアップ事業補助金を申請。
- 5) 連携：今年3月小学校校長にお願いし、プレミの所属する子どもの担任の



先生と話し合いの時間を作ることができた。事前に子どもの保護者にプレミスタッフがお子さんについて話をさせてほしいと確認をとると、快諾をいただくことができた。話し合いによって、学校での様子や友達関係を知ることができたことに加え、先生から「プレミ」スタッフに臨むことなどを聞くことができ、今後の活動の方向性を明確にすることができた。

(2) 校内居場所カフェ

①取り組み内容

「校内居場所カフェ」に至った理由には、現在、子ども食堂や「世田谷ユースキッチン in 松沢（小学5年生以上から18歳までを対象に、食事を自分で作れるようになることを目指す）」の経験と、平成31年に行われたシンポジウム「居場所カフェが教育を変えていく」に参加したことで関心を持ち、「中学生が気軽に立ち寄り、ホッとできる居場所を中学校内に地域の輪で創る」ことをできるのでないかという思いからである。今回は実践的な取り組みまでに至っていないため、実施に向けた課題整理とした。

②実施に向けた課題整理

1) 実施スケジュール：

- ・実施候補区立中学校校長訪問
- ・ステーキホルダーへのヒアリング
- ・学校との信頼関係づくり
(実施候補区立中学校内での地域活動、報告等)
- ・活動参加者、賛同者の発掘
- ・具体的のどのようなことをするか探求、話し合い
- ・視察、見学
- ・試行
- ・振り返り
- ・実施

2) 場所：学校内の場所を借りて定期的にカフェを開催。

3) 運営：地域住民を中心に立ち上げ、簡単な飲み物とお菓子を用意する。

4) 連携：区立中学校、社会福祉協議会、大学などを想定。

5) ヒアリング：

・区立中学校長

・校内カフェに対する感想

⇒現在、区内の中学校の中では、地域との関係は活発と言えない

・ふらっと立ち寄るという時間をどう扱ったら良いのか

⇒地域に開かれた学校の観点から、活動の場として学校を使うことには問題はない

・子どもたちは利用するか

⇒校内カフェの開催は現在の活動の実績を積んでからが望ましい

・実施に向けた課題

⇒平日の放課後実施は、生徒の安全管理上難しい

⇒学校は地域に開き始めている段階で、活動実績を作ってからが好ましい

⇒子どもたちは利用するだろうか

・スクールソーシャルワーカー（区外の中学校）

・校内カフェに対する感想

⇒ふらっと来ることができる雰囲気、大げさではなく、さりげないほうが訪れやすいのではないかと

⇒場所の広さ、環境としては、「〇〇さんが来るから」となることが想像できるので仕切ることができる広さがあるとよい

⇒カウンセラーなど校内の専門的な人から声をかけられると利用の動機づけになることもあるのではないかと

⇒朝ちょっと立ち寄れる朝カフェや、児童館カフェから始めては

・ 中学2年生女子

- ・ 校内カフェがどんな場所だといいか
 - ⇒ ちょっと一息つける場所が校内にあるといい
 - ⇒ 10分、20分の仮眠が取れるといい
 - ⇒ 一人でもフラット行かれる場所がいい
 - ⇒ リラックスできる音楽がかかっているといい
 - ⇒ いろいろな人と話がしたい
- ・ なぜ、職員室の前を通らずに行かれるところがいいのか
 - ⇒ 先生に「どこ行くの？」と聞かれるから

・ 中学3年生女子

- ・ 校内カフェがどんな場所で何がしたい
 - ⇒ 愚痴を言える場所がいい
 - ⇒ ホワイトボードがあるといい
 - ⇒ 抱き枕などリラックスできるものがあるといい
 - ⇒ 甘い飲み物とお菓子があるといい

・ 保護者

- ・ 校内カフェに対する感想
 - ⇒ 学校帰りに立ち寄り、気持ちを切り替えることができる場所があるといい
 - ⇒ この地域には子どもがふらっと行かれる場所が少ないと感じる
 - ⇒ 大人が仕事帰りに一杯寄ってから家に帰るように、子どもにもそういう場所があるといい、校内にあると安心感がある

・世田谷区社会福祉協議会担当者

・校内カフェがどんな場所だといいか

⇒小中高校生の居場所支援がこの地域には少ないと感じている

⇒学校に馴染みにくい子どもの視点に立つと、学校内に学校とは関係ないところからきている大人がいる場所があるといい

⇒同じ空間でもいる人が代わると雰囲気が変わり、学校内に校内カフェのような環境があると、学校に行きにくい子、そうなりそうな子に何らかの引っかかりになるかもしれない

⇒子どもにとって、学校と家庭の間のストレスの発散の場になるのではないか

⇒大学生をスタッフに混ぜていくのもよいのではないか

・神奈川県立田名高校「ぴっかりカフェ」ボランティア

・校内カフェに対する感想

⇒区内で前例のないことをつくっていくにはわかりやすい理由づけが必要ではないか

⇒学校3年間という時間は、子どものとの関係性をつくるのにはメリット

⇒子どもとスタッフの個人的なかかわりを防ぐことにつながるため、スタッフ間でその日の情報を共有する

・実施に向けた課題

⇒校長先生が代わると方針が変わることがあるため、学校との情報共有、信頼関係の構築が活動を継続していくためにはとても大切

・地域の住民

・校内カフェに対する感想

⇒学校に行きにくい子、そうなりそうな子が学校に来るきっかけになるかもしれない

⇒ふらっと来ることができる雰囲気が重要

⇒地域だけでなく専門性のある人がかかわることも重要、地域の大学生がかかわるのもいいかもしれない

⇒朝カフェや児童館カフェもあり得る

- 6) 効果：主な効果としては、「学校に対する地域住民の意識の変化のきっかけになる」、「地域の拠点として親しみが生まれる」、「一緒に作り上げていく可能性に満ちた場所となる」、「程よい距離感を持ちながらの子どもたち、地域の人との交流の場」などが挙げられる。

(3) おやじの会

①取り組み内容

おやじの会では、学校と連携しながら子どもたちの健全育成や、父親の横のつながりのために、花火大会や学校でのキャンプなどの企画運営を行っている。また、活動を通して「大事にしていること」やおやじの会に関するインタビューから父親の本音や他のおやじの会の参考になる意見を聞くことができた。

②活動内容

1) 東深沢小学校おやじの会

○おやじの会とは（地域のおやじのコミュニティ）

- ・東深沢小PTAのサークル組織
- ・メンバーは小学校に通う児童の父親とOB
- ・地域のイベントの参加と学校のイベントの手伝い
- ・イベントの参加は自由。あくまで家庭・仕事優先！

○年間スケジュール

- ・入学・卒業式、花火大会、学校でキャンプ、ナイトウォークなど、毎月参加や手伝い等の活動がある

○サークル活動

- ・ゆるラン部、軽音楽部、フットサル、ソフトボール部、旅行部

○活動で大事にしていること

- ・キックオフミーティング（とにかく打ち合わせをしよう！）
 近くの集会所で懇親会も兼ねて最初のミーティングを開催
 子どもたちの意見も聞きながら、イベント内容を決めていく
 居酒屋より安上がりなのも魅力
 清算で余ったお金は会の活動資金に
- ・スケジュール作成（持っているノウハウを集結して）
 オンラインでの打ち合わせも設定
 その先に子どもたちの笑顔あるのなら！
 打ち上げまでがイベント
- ・担当班に分かれて（各班ごとに検討を進めていく）
 それぞれの中身の詳細を班に分かれて検討

- ラインでのやり取りをメインに、必要に応じて対面も実施
- ・トライアルも実施（試してみなきゃようわからん）
子どもたちの意見も聞きながら、子どもたちの目線で
何にどれくらい時間がかかるのか、注意点などが見えてくる
 - ・全体ミーティング（週末の夜にアルコール片手に）
各班の検討状況を共有、課題になっている部分を潰し込む
イベント全体の流れを確認、イメージを共有していく
 - ・募集開始（チラシ作成、配布）
オリジナルの募集チラシを作成、印刷
クラスで配布、学校の廊下に掲示
申し込みはおやじの会のホームページで
 - ・学校との打ち合わせ（副校長先生を窓口）
安全運営を前提に、出来ること出来ないことを
擦り合わせる
 - ・ラストスパート（最後まで気を緩めずに）
まもなくイベント本番、保護者からの個別紹介にも対応しながら、準備
を進めていく
※仲間たちと楽しみながら！子どもたちの笑顔と保護者の方からの感謝
の声が原動力！



2) 駒繫小学校おやじの会「繫組」(インタビュー動画より抜粋)

○あなたにとっておやじの会とは

- ・地域貢献の場所
- ・地域のコミュニケーションができる唯一の利害関係のない人達の知り合う場所
- ・学生時代のクラブ活動に近いもの
- ・地元だったり地域でのおやじの友達をつくる場
- ・人との繋がり、地域の人の顔を知れるのが一番良い

○おやじの会活動は強制ですか

- ・特になくて、繫組はやりたい人がやりたい時にやるというコンセプトでやっているの、全然来ていなくても言われないし、楽しくやっている

○あなたがおやじの会に求めることは

- ・普段のコミュニティとは違う地元との繋がり、職場とか昔の学生時代の繋がりはあるが、おやじの会のおかげで凄く地元に密着できるようになったので、より地元が好きになった

- ・地域との連携だったり、防災意識だったりという部分で活動できればいい
- ・間口を広げていろいろな出来るだけ多くの人に関わってもらって地域を支えられるようになるといい

○学校との連携はいかがですか

- ・今うちは減茶苦茶いいと思う。校長先生が素晴らしい方なので、やりたいことをやらせていただいているし、フットサル・ソフトボールも校庭を借りてやらせていただいているので、すごく順調だと思う。
- ・校長先生も副校長先生も凄いい理解があって全然上手くいっていると思う
- ・おやじの会主催のイベントとか、コロナ禍で本当に動きができなかったので、運動会であったり、ライブ配信の協力など学校行事の協力をさせていただいた。副校長先生とはかなり密につながっていて花火大会とかイベントの企画もやらせてもらっているので、お互い上手く助け合っていると思う。

○どうすれば学校との連携をもっと深められるでしょう

- ・コミュニケーションだと思う。先生達の求めているものを聞いてコミュニケーションが取れると信頼関係ができて深まっていくと思う。他の学校のことを聞いているとおやじ達（の盛り上がり）だけで先生たちはあーだこーだというふうになる場合もあったし、実際聞いてきたのでお互いのコミュニケーションが少ないんじゃないかと思っている
- ・凄くざくばらんに学校側とおやじの側でももっと打ち合わせる場があってもいいのではないかなと思う
- ・まだまだできるかなと思っている。学校側もおやじの会にもっと頼ってもいいと思うし、一緒に活動する場がもっとあってもいいと思う。親睦会みたいな飲み会とかあってもいいと思う
- ・お互い忙しいと思うので、先生たちが忙しいと気を遣ってしまったり、なかなか時間が難しいので、最初のハードルを下げる工夫があればいいのかなと思う。最初は全員で参加する企画とかイベントとか飲み会とかそういう場ができればまずは入口でどんなものかわかってしまえば、あとは踏み出してしまえば行けるので、そういう取り組みができればいいと思う

社会とか職場を離れて地域で絆をつくって楽しくやれる仲間をつくって、それが趣味だったりスポーツだったり、それがイベントだったり地域の防犯だったりにつながるので、本当にこの活動が続けばいいと思う

（４）東深沢カフェ（仮称）

①取り組み内容

東深沢スポーツ・文化クラブ（以下、HFSCC）は、区内初の総合型地域スポーツ・文化クラブとして 2002 年に区立東深沢中学校を拠点に発足した。発足当初から「学校は地域のためにある」が学校と地域のコンセプトとし、地域の多世代がスポーツ、文化活動を通してつながり合い、青少年の健全育成と豊かな地域社会をつくることを目指している。現在は、21 年目を迎え、25 のクラブがあり、483 名の会員がいる。一方、スタッフの世代交代や部活動の外部委託、



新たな自主クラブが数年誕生していないことなどが課題としてあげられる。

これらのことを踏まえ、今回、「多世代交流の場」を目的に、「東深沢カフェ（仮称）」をまずは会員限定に令和 5 年 12 月よりトライアルで行ってみることとした。

②活動内容

- 1) 時間帯：月 1 回程度 土曜日の午後 1 時～午後 6 時
- 2) 場所：東深沢中学校「ランチルーム」
- 3) 運営：HFSCC とし、いち自主クラブ的位置づけとして運営
- 4) 資金：経済的な支援は、会員、地域、スポーツ振興財団からの寄付または支援とする
- 5) 連携：12 月の開始に向け、学校の教育活動との共存共栄が求められることから、学校の理解と協力や安全安心の担保等、学校の管理者である校長先生と意思疎通を図っている。現在も「学校は地域のためにある」というコンセプトが存在しており、好意的に進められている。

③課題

- 1) 安全・安心の確保
 - ・一般地域住民に向けてのオープン化
 - ・飲食の安全化
- 2) 中学生との参加と参画
- 3) 部活動との連携
 - ・部活動時や前後の休憩時、ミーティング時の活用
 - ・部活動の地域連携の拠点としての活用
- 4) 地域と学校との連携・協働拠点としてのクラブハウスの創設

第3章 地域資源活用型連携・協働モデルの成果の検証

約半年間をかけ、地域資源を活用した連携・協働モデルの計画づくりと実践に向けた準備を各担当委員が行ってきたが、特に校内を使用した取り組みについては、衛生管理やセキュリティなど様々な問題や課題があり、試行的実践に結びつかず検証をするまでに至っていない取り組みもあった。

一方で、今後の連携・協働を実践していく上で参考となる可能性や課題を見出すことができたことは大きな成果となった。

1 居場所となり得る空間（場）の提供

各取り組みについて意見交換するなかで、子どもたちは、学校での出来事をリセットし、少しでもリラックスして家に帰ることを求めているようである。学校とも家庭とも異なる空間とはどのような場であり、どのように提供したらいいのかを探ることができた。

- 部活が終わって暗くなっても帰らないというのは、学校が終わった後、たまる場所や話せる場所のニーズがあると思うので、校内にそういった場所があるといいのではないかな。
- 学校とも家庭とも異なる空間では、子どもたちが気軽に立ち寄れる雰囲気だったり、飲食ができるスペースのほかに雑談や好きなBGMを流せたりすることができる空間がふさわしい。
- また、何もしなくてもよく一息つける空間も必要なため、ある程度の広さや仕切ることができるスペースも必要である。
- 例えば、校内カフェでは、子どもたちをお客さんとして迎え入れるだけでなく、中学生の自発的参加を募り、活躍の場として提供していいのではないかな。
- 「カフェ」などは試行しながらのため、未完成（いい加減なサービスと不完全なサービス）の取り組みから始まるが、結果、いつも何かが不足し、それにより生徒の主体性がはぐくまれ、居心地の良い場所を自分たちでつくり始める（その過程の変化を楽しむ、参加から参画へ意識変化）ことにつながっていく。
- 学校のない土曜日などには、学校になじめないような子どもたちの「引っかけり」にもなる可能性があるため、そのような子どもたちの居場所的な場も必要ではないかな。
- 一方、学校になじみにくい子どもの視点に立てば、学校内ではなく、また学校とは関係のない大人やスタッフのいる場所があるといいのではないかな。学校内に「カフェ」があることの意味は何なのか、改めて考える必要があるのではないかな。

- コロナ禍でもあっても、支援を必要としている「子どもに会うチャンス」をつくりたいという思いから始まったおやつステーションは、たった「30 秒の出会い」であっても子どもたちとつながるきっかけとなり、様子を知るうえで必要な取り組みとなっている。

2 持続可能な活動に欠かせない地域人材の存在

どのような活動においても、子どもたちの様子を継続的にサポートし、見守れる大人の存在は、学校にとっても地域にとっても必要不可欠であるが、そうした人材がないのが現状である。今後は、まず大人自身が活動できるきっかけをつくる必要がある。そのためには、地域での過ごし方や生き方を考えていけるような場をどうつくっていくかが大事である。

- 大学生をスタッフにすることで、中学生は身近なロールモデルを見ることができ、将来の自分を具体的にイメージし、今までやらされごとだった宿題や課題への取り組みが、自分事へと意識が変わり取り組み方が変わってくることもあるのではないかな。
- ふだん先生にはなかなか相談できないことも、年齢の近い大学生スタッフの方たちの相談し、良いアドバイスをもらっていることもある。
- コロナ禍では、活動が危ぶまれ、スタッフ間でも活動をするべきではないや、ボランティアの域を超えている、また何かあったら誰が責任を取るのかななどの意見があったが、互いに意見を出し合ったことで、「できる人ができるときにやっていこう」と決めることができた。これは動いている人を批判するのではなく、やめさせるものでもなく、現場でかかわらなくても名簿づくりや親との連絡など家にいてできる下支えする役になってもらえるので、そうやって続けていこうと何度も話し合いを重ねた結果、みんなの気持ちが一致したことで、改めてスタッフ間の絆を強めることができた。
- スタッフの間では、その日の情報を必ず共有をする。これはスタッフが問題・課題などを一人で抱え込むことを防ぎ、子どもとスタッフの個人的なかかわりを防ぐことにつながる。
- おやじの会では子どもが小学校を卒業すると、中学校ではおやじの会がほとんどないため、せっかくできたコミュニティや個人の活躍の場が途切れてしまうことがある。
- 地域には、おやじたちが連携してする活動がないということが最大の問題である。地域の中に活動する団体はあるが、つながることが少なくここでの活動にならざるを得なくなっているため、何らかの参加の仕組みをつくる必要がある。

- うまくいっているおやじの会は、小学校を起点に「こんなことできるけどどう？」
「こんなことやってみたらどう？」と投げかければ相乗効果でどんどん盛り上がっていく。
- おやじの会の若い父親は、地域でつながるチャンスはなかなかないので、おやじの会は最大につながるチャンスになっている。
- ふだんから学校行事やイベントにかかわることで顔見知りとなることから、様々なことを学校側にお願いしやすくなるとともに、学校側も安心して信頼できる地域人材となっていく。
- 子どもたちにとって、地域行事やイベントがあることで、地域につながる意味を体験することになるため、大人になったときにそういうことが当たり前に感じられる。

3 地域と学校の新たな連携・協働のあり方

「連携・協働」というワードをよく耳にすることが多いが、そもそも「連携・協働」とは何か。地域が学校に対して単に協力することではない。

時代にあった「連携・協働」を進めるにあたっては、地域と学校ではそれぞれの性格や役割が異なるため、それには相互の強みを活かし合えるよう、本来目指すべき目標を明確にすることが重要であり、それに向かって地域ができることは何かを探ることが大事である。

- 学校との取り組みで、前例のないことをつくっていくには、わかりやすい目的などの理由づけが必要ではないか。
- 前例のない取り組みだから理由づけが必要だと言われるが、今の子どもたちの事情の中でこういう居場所をつくるということが大切であるにもかかわらず、それ以上の何の理由が必要なのか。
- 理由づけがないところが「カフェ」の良いところで、来る子どもたちには何か意味があるだろうかということで、本当に一息つける場所をつくりたいと思っているが、学校とのヒアリングを通して考えると、理由づけは必要だと感じている。
- 学校によっては、地域に開き始めているところもあるため、特に学校施設を使っ
ての新たな取り組みを実施する際は、児童館のような公の場で実績を積み、人の信頼、活動への信頼を積み上げてからのほうがいいのではないか。
- 学校にお願いしたいことは、学校とおやじの会との交流の機会をつくっていただければ、連携ができるつながりができてくるのではないか。
- おやじの会的な発想でいうと、先生と「一杯飲みに行こうよ」で終わる気がする。
飲みに行かなくても、一回腹を割ってお互いの思っていることを話すと、その後の情報連携だったり、話しやすさがだいぶ変わる。

- もう一つは、一緒に苦勞すると仲良くなる。先生は忙しいからいろいろな制約はあるが、例えば、ソフトボールのメンバーとして一緒にチームの中で行うと、自然と仲良くなって、コミュニケーションを取りやすくなる。
- 自分たちがやりたいことや、こんなことをやったら学校側は前例がないから駄目とはいわない。どうすればできるかを一緒に考えてくれるから、おやじたちは学校側を「素晴らしい」という。また、おやじたちも学校に様々なことを協力しているため、お互いに「ウィンウィン」の関係になっている。
- 東深沢カフェでは、基本的なコンセプトは「多世代交流と教育支援」である。これは学校の教育活動と東深沢地域スポーツ文化クラブの共存共栄をあらわしている。東深沢地域スポーツ文化クラブを設立する際の当時の校長先生が、「学校は地域のためにある」ということを言われ、それは今でも地域の哲学になっている。
- 校内で飲食を伴う取り組みで大きな問題は、食中毒や感染症など食品衛生上の問題、昼休みや放課後など、どの時間帯であっても生徒の安全管理があるため責任の所在の問題、当面の対象を地域の誰でもとはならないためのセキュリティの問題、学校教育活動の支障にならないよう場所の問題などがあげられる。
- 学校とオープンに話せる場があれば、地域が入ることによってよりよく変わる可能性があるのではないか。学校は囲い込まず開くことで先生たちが気づいたり学ぶことがあるのではないか。
- 学校とオープンなコミュニケーションを求めているが、学校は多忙なため、アポイントを取るのが難しい。電話してもつながるまでに時間がかかることもあるし、いつ電話してもいいのかわからないし、メールしても返信が遅い場合もあるので、その辺りをどうするかが課題ではないか。
- しかし、以前に比べ学校は、もっと大変かと思ったら、意外にも先生方ともに「どうぞどうぞ」というリアクションがあって、これは少し行けるという手応えを得られた。ただ、実際に学校に連絡を取り合おうとすると、いろいろなツールは世の中一般で使われているものからすると、少し学校は固いし、遅いなという印象を持った。
- 学校側は、地域の人が何を考えているのか、どんな動きがあるのかなど知りたいという気持ちや興味をもっている校長先生もいることも感じられ安心した。
- この地域はドライという学校側の意見に対して、特に商店街などが無い住宅街では地域とのつながりはないような気がするが、ただし、一度でもかかわってしまうと一生懸命になってかかわる人がいて、そういう人たちが NPO をつくったり、地域で子どもたちを育てようという動きになるのではないか。そのことを学校は知らないだけなのではないか。
- 特に若い先生は、学校業務に追われ、地域のことについて知らない先生のほうが

多いのではないかと。また、学校に愛着を持ってかかわりたくても、できない事情もありそういった意味では、ドライに前の段階でよく知らないというのが正しいのではないかと。ただ、何かをきっかけに連携したり一緒にしたりすると何かが見えてくるのではないかと。

- 4つの取り組み共通しているものは、学校教育ができない部分、言い方を変えれば学校教育の隙間を埋める取り組みと言えることができるのではないかと。あとは学校とどう協働し、タイアップするか、つながりをつくっていくかが課題ではないかと。

4 まとめ

時間的制約もあり、すべての取り組みを実施することはできなかったが、「1 居場所となり得る空間の提供」では、学校とも家庭とも異なる空間の中で、気持ちを切り替えたりリフレッシュするなどのストレス発散の場が、今の子どもたちにとって必要であることがわかった。そのためには、やらされる活動ではなく、忙しくても自らが「やりたいこと」を「楽しむ」ことができる活動であれば、「2 持続可能な活動に欠かせない地域人材の存在」として関わることはできるのではないかと。今後は、「やりたい」ことを「楽しむ」ための上手い仕掛けをどう作ることが課題である。そして、これらのことを踏まえ、学校を支える地域となるためにも、「連携・協働」の目指すべき目標を明確にするとともに、それぞれの地域の特性を活かしながら、改めて地域ができることは何かを見つめ直すことが、持続可能な「3 地域と学校の新たな連携・協働のあり方」になるのではないかと結論づけた。

今後は、今期の活動報告書を手がかりに、地域と学校が協力し合い、連携を深めることで、よりいっそう充実した教育環境が育まれることを期待したい。

おわりに

第 29 期の報告書では、地域と学校でつくる連携・協働の新たな仕組みづくりに向けて、①連携に必要なジョインター（学校と地域をつなくパイプ役）の育成とネットワーク化、②誰もが気軽に参加でき、地域の思いを発信できる環境整備、③従来の連携・協働の考え方ではなく、地域にある様々な資源を有機的に組み合わせることで、想像しえない偶発的な化学反応をつくりあげるというオープンイノベーションの考え方を取り入れること、が提言された。

第 30 期の会議では、そうした提言に即して、社会教育委員がメンバーとして地域で活動している 4 つの団体、すなわち、【子ども食堂】【おやじの会】【子どもぶんか村】【総合型地域スポーツ・文化クラブ】を事例として、「そこでの活動がなぜ、うまくいっているのか」「活動をするうえで大事にしていること」などをグループワークや実践的試行を交え、多面的に考察していった。

詳しくは本文にゆずるが、【子ども食堂】と【おやじの会】の活動は、個人の発意や創意を起点とし、従来型の連携・協働とは異なるスタイルで活動が多く含まれていた。例えば、【子ども食堂】の主催者が「何に縛られるわけでもなく、なんとなく、ふわふわと人があつまってきて、楽しくやっている」「さまざまな事情で、あるエリアでの子ども食堂を閉じて、別のところで別の名前で活動を継続していけばよいのでは」と語っていたが、そこには「組織化されていないこと」のメリットや「活動を終えることで、むしろ、継続していくのである」という発想がある。

【おやじの会】の活動報告では、会社のように「決まりごとや上下関係がない」からこそ、「やりたい人がやりたいこと」を好きなように、イキイキと活動し、充実感・達成感を得ている姿がみられた。「忙しいとか時間がないとかよく言うけれど、それはやらされているから。面白いと思って、自分から意欲的にやるときに人は動く。子どもに一番、教えなくてはならないのは、そういうことではないか」との意見は、耳は痛いが核心をついている。

【子どもぶんか村】と【総合型地域スポーツ・文化クラブ】は、どちらも、しっかりとした組織に支えられ、長きにわたり活動をしてきた団体である。【子どもぶんか村】は「自分のことが好きになって、仲間のことが好きになって、住んでいるまちが喜欢になって子ども同士大人同士がつながっていく。私たちはそんなまちづくりをめざしています」、【総合型地域スポーツ・文化クラブ】は「私やあなたが毎日生活している地域で、だれでも、いつでも、いつまでもスポーツや文化活動が楽しめるよう、地域（私やあなた）が少しずつ力を出し合って運営していく、手づくりのクラブです」と宣言をしているが、わかりやすい言葉で団体の理念を共有し、役員への研修等を重視していることが長く続く秘訣のようだ。他方で、スタッフの世代交代や新しいクラブができ難いこと、

また、部活動の外部委託への対応などの課題もあることがわかった。

さて、第30期に対する、世田谷区教育委員会からの諮問は「地域資源を活用した新たな連携・協働の実践的モデルづくりと検証」である。時間的な制約もあり、新たな実践的モデルをつくりだし、それを検証することまではできなかったが、試行と意見交換するなかで、いくつかの可能性や課題を見出すことができた。すわなち、①子どもたちが学校でのできごとをリセットして、リラックスしてから帰宅することを求めている、学校とも家庭とも異なる、居場所となる空間（場）へのニーズがあること、②どのような活動においても、子どもたちを継続的に見守り、支援する大人が不可欠であるが、そのためにも、まずは大人自身が生き方を再考するきっかけをつくり、地域での活動の場をどのようにつくっていくかが大事であること、③新たな連携・協働を進めるに際して、学校と地域の活動はそもそもの原理や機能が異なること理解し、相互の強みを活かし合えるあり方を探っていくことが重要であること、などが確認できた。

校内カフェの試行が報告された際に、「学校のなかに学校とは関係がない人たちがいて、子どもたちがふらっと立ち寄れるような時間と空間を作れないか」という意見が出され、さまざまな意見が交わされた。学校は意図的計画的に教育活動を行う場所であるので、これまでは学校というところでは、教育と無関係な人や活動というものは想定されていなかった。しかしながら、自然災害やコロナ禍などを経て、仕事のあり方や人々の考え方も大きく変化した今日、親たちが子どもといっしょに登校し、校内カフェでコーヒーを飲んでから図書館でテレワークをしたり、夕方、部活動の指導も兼ねて身体を動かしたり趣味を深めたり、給食室や家庭科室を活用したシニア食堂で地域の高齢者と交流する、というのも夢物語ではない。すでに、体育館などは地域のスポーツ団体に開放しているし、「スクール・サポート・スタッフ」や「地域学校協働活動推進員（コーディネーター）」と呼ばれる教員以外の大人たちが公的な制度として導入され始めており、従来の学校が変わり始めている。

他方で、「地域が学校と連携し過ぎて、地域主導の活動がミニ学校化してしまっているのではないのか」という意見があったことは、今後の連携・協働を考えるために、忘れてはならない視点である。加えて、地域資源の活用は学校のためだけであってはならず、なによりも、その地域で暮らしている人々（子どもも大人も）の幸せな生き方(well-being)を実現していくことに資するべきである。

最後になりましたが、2年間という限られた時間のなかで本報告書をまとめることができたことは委員のみなさん、そして、教育委員会事務局の生涯学習課をはじめとする関係者のみなさんのおかげです。深く感謝を申しあげるとともに、世田谷区における学校、家庭、地域の連携と協働がさらに豊かなものになっていくことを祈念して、結びといたします。ありがとうございました。

第30期社会教育委員の会議 議長 井上 健

資料

□資料 1 第 2 9 期世田谷区社会教育委員の会議活動報告書（概要）

第 29 期世田谷区社会教育委員の会議報告書（概要）
—地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくりに向けて—

第 1 章 会議の検討にあたっての課題認識

1 事例研究①「おやまちプロジェクト」現地視察と意見交換

- (1) 「おやまちプロジェクト」とは
- (2) 意見交換（要約）
- 2 事例研究②「協力・連携・協働の活動シート」から関係性のしくみの検証
- (1) 事例紹介
- (2) 意見交換

第 3 章 「地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみ」の具現化（課題抽出・整理）

- (1) 連携・協働する意味や必要性とは何か
 - ・「おやまちプロジェクト」のように、結果的に学校のためにやることで地域の大人の学習や学びへとつながるため、地域にとつてもメリットになる。
 - ・連携の意味としては、多世代交流がある。子どもは未来だし地域の財産でもある。そのため、学校や地域だけで達成することができない。また、連携によって学校と地域の両方が活性化され生き生きすることにつながる。それには「信頼関係」や「安全安心」がキーワードになる。
- (2) 連携・協働のメリットとは
 - ・一番大きな効果は、大人総がかりで子どもを育てていることになるので、キャリア教育の充実や、市民教育のような市民をつくるものがある。
 - ・学校のメリットとしては、地域の教育力の活用である。世田谷は地域の教育力が潜在し、ポテンシャルも大きい。地域の教育力の活用は、地域財産の活用ということができる。
- (3) 地域と学校をつなぐ存在とは
 - ・連携するうえで、学校支援コーディネーター、青少年委員、地区委員などの存在は非常に重要な存在である。(3)とんどが P T A の経験者であるため、学校と地域をつなぐ存在として、またその関係を次に伝えていく存在として P T A という組織が非常に重要である。
- (4) 連携・協働のデメリットと阻害要因とは何か
 - ・コミュニケーションの問題があつて、地域の中で学校を核にしてみんなが関われるようになるためには、学校がコミュニケーションをつくるというよりも、そもそも地域の問題であつて、地域に良好な関係性があれば学校と関わることはできるのではないか。
- (5) 地域と学校は対等でないといけないのか
 - ・地域によつても状況が違ふので、どこも全く同じように関わりを持たなければいけないということもない。そこは必ずしも対等ではなく、相互に協力・連携・協働ができる要素が少しでもあれば対等である必要はない。
 - ・地域の教育力が学校に生かされているということである。両者の力の大ききではなく、ワイソワイソの関係性を持ち続けることで、両者にメリットがあることが重要であつて、対等である必要はないのではないか。



第 2 章 「地域と学校でつくる連携・協働のしくみ」に向けた方向性と方策の検討

1 プラン・アクト・グランド

- (1) 地域グループ付箋図
- (2) 学校グループ付箋図
- (3) 意見交換
- 2 プラン・アクト・グランド
- (1) 地域グループ付箋図
- (2) 学校グループ付箋図
- (3) 意見交換

—提言—地域と学校でつくる連携・協働の新たなしくみづくりに向けて

新たなしくみづくりには、どの地域でも地域にかかわる個人の「やってみたい」という思いを発言したり、共有できる場の整備が重要である。そして、場を提供し個人の思いだけにとどまらず、地域にある資源を有機的に結ぶことができるジョイントダーの存在は欠かせない。どの地域でもある資源を有機的に組み合わせることで、新たな連携・協働が可能となる。それには以下の方策を前向きなことで従来の新しい持続可能な連携・協働のしくみが構築されると結論づけた。

方策 1 連携に必要なジョイントダーの育成とネットワーク化

ジョイントダーは、学校と地域をつなぐバリエーションのことである。今後はいかにジョイントダーとなり得る人材を育成し、ジョイントダー相互をネットワーク化することが重要である。

方策案①地域の各層（ベント）等に P T A が無理なく参加して後継者が育つようしくみづくり

・現状の P T A の保護者であるときから、地域の様々なイベント等に参加、参画して、ジョイントダーとかわかることで、顔見知りとなり、ジョイントダーの役割を理解し、地域活動の必要性や課題等を把握できるとともに、地域活動の面白さややり甲斐等を育むことができるため、後継者として育つ環境の整備が大切である。

方策案②ワーキンググループやシンポジウムの開催

・地域活動についてどうしたらいいのか分からない人もいいため、社会教育委員の会議によるシンポジウムを開催し、「おやまちプロジェクト」をはじめ、区内の成功事例やジョイントダー相互の意見交換・交流等の機会を持つ。また、国立・私立に子どもが通う保護者等、これまであまり地域とかわかりが少なかった方などを対象に、楽しいまちづくりの提案やわくわくするようなワークショップを企画・運営する。さらに、そこに集った人をジョイントダーの後継者とするための機会とし、ジョイントダーの育成と確保につなげていく。

方策 2 誰もが参加できる環境整備

地域の愛着心を育むきっかけにつながるよう、その地域に居住している人だけではなく、地域に通学や運動している人も含め、誰もが気軽に参加でき、地域への思いを発信できるような環境の整備が重要である。

方策案①「地域の未来を考える会（仮称）」の開催

・地域にかかわる人のベクトルを同方向にするような仕掛けは、何かを始める原動力にもなるため、「地域の未来を考える会（仮称）」を開き、地域の長年住んでいる高齢者の方から、地域の成り立ちや変遷などの話を伺ったり、また、自分のいる地域の 30 年後、50 年後の未来がどうあるべきかなどを多世代で話し合う。これにより、地域への思いが強くなるとともに、「みんなこのまちが好きなんだ」ということに気づき、何かを始めようとする原動力となる。

方策案②誰もが「やってみたい」を発信し共有できる場の提供

・子どもから高齢者まで、また通学や通勤する人も含め、誰もが参加しやすい時間帯や情報交換しやすい雰囲気のある場の設定が重要である。参加者の何気ない一言が地域活動の取り組みのきっかけとなる場合があるため、場を仕切る人はこの何気ない一言を聞き逃さないことが重要である。

方策 3 今後の発展に向けた新たな視点と手法

今後は、従来の連携・協働の考え方ではなく、地域にある様々な資源を有機的に組み合わせること、想像しえない創発的な化学反応をつくりあげるといふ、「オーブン・イノベーション」の考え方を取り入れることが重要であり、地域のさらなる発展につながる可能性を秘めている。

方策案③地域資源の活用

・地域はまさに人材の宝庫である。例えば、高校生や大学生との連携は、子どもたちにとって、少し年の離れた憧れの存在としての目標にもつながり、多世代交流だけでなく、地域課題解決にもつながる。いかに多様な人材を有機的に組み合わせるかで、これまでにない連携・協働が生み出される。

□資料2 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅰ検討事項シートまとめ

【子ども食堂】

より連携・協働するために何が必要か	連携・協働における障壁になっているものは何か	どんな連携・協働が考えられるのか
○先生が子どもに情報提供することも大事（子どもは安心していくことができる） ○子どもの情報（友達のことや先生のグチなど） ○先生の情報（子どもの状況など） ※学校との連携のきっかけになるのではないか ○子どもの状況についてどこにつなげていけばいいのか ↓ 大人のつながりを増やす	○個人情報 ○学校（校長）の多忙化 ○食堂に先生が来ることが子どもにとっていいことなのか ○親の登録（フィルター） ※アレルギー、保険など ○学校にどのように関わってもらうか ○子ども食堂の場合 学校と連携し過ぎるのは学校化につながるのではないか “ミニ学校化”のようになってしまくと、子ども食堂の良さがなくなるので、それを踏まえうえで連携の仕方を考える	○スタッフ（包括支援員）を介して情報のやり取りが少しできている ○中学校の施設を借用 ○子ども食堂の目的によって連携のあり方が異なる ○間接的な連携はある（子ども理解） ○窓口－校長（協力的） 活動報告 ↓ プラスの情報交換 居場所としての要素 食事＋α ○子ども・親の本音の共有（学校とつながる） ○協働－学校の隙間を埋める ○学習支援、学校カフェ ○学校にチラシを配布（間接的連携）

【おやじの会】

より連携・協働するために何が必要か	連携・協働における障壁になっているものは何か	どんな連携・協働が考えられるのか
○学校との情報共有（保護者とのコミュニケーションの場があれば、学校側にも意見を言いやすくなる） ※相互に言いやすい関係づくり ○校長・副校長と仲良くする ○子どもにかかわれる機関や制度が不明(連携されているのか、全体像が見えない)	○学校・行政の枠にはまらないやり方組織だってない関係性 ○学校に関係していない人はコミュニティがないので、そういう人たちを置き去りにしてよいのか	○学校のイベント協力（手伝い） ↓ 学校は喜ぶ ○学校施設を優先的に借用 ○子どもとおやじと一緒に考え作り出す企画会議 ○おやじの会らしい中に、そういう人たちが関われるスタイルや空気感が見つかるかもしれない（モデル抽出）

【共通項】

○子どもが中心 企画段階から参画※大人がすべて考えるのはダメ、一緒に作り出すことが大事 ○3団体は学校施設を使用 ○学校ができない隙間を地域が埋めていると考えれば、関係性をつくる範疇に入るのはではないか ○大人が楽しむ、力を貸すだけではなく、子どもがやりたいということを企画の段階から関わらせる「企画会議」のようなものをやると、子どもも大人ももっと参加するのではないか
--

□資料3 実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ検討事項シートまとめ

【総合型地域スポーツクラブ】

より連携・協働するために何が必要か	連携・協働における障壁になっているものは何か	どんな連携・協働が考えられるのか
○指導者の問題（働き方改革と部活動の地域移行） ・ どう維持発展させていくか →解決手段としてスポーツクラブの対応が可能ではないか ・ スポーツクラブの空手道クラブの指導者が武道の授業で教えている →部活動に空手部はないが今後部活動とのタイアップが課題 ※部活動×総合型地域スポーツクラブとの連携が可能 ○課題 ・ 部活指導（生徒との関係） ・ 部活の存在意義（生徒や親でも意見が分かれる） ・ 地域で支える部活動にするためには ・ 教員とどのように協働するのか同じ目標を持ってやらないとうまくいかないのでは	○学校施設の問題 ・ 部活動優先のため土日以外の日中は使用不可（特に大会前は部活動が優先的となり制約がかかる場合がある） ・ けやきネットでは、部活動が優先され、次にスポーツクラブが予約するので一般利用はほとんど空きがない状態。 ○部活動の地域移行の問題 ・ 指導者の確保 →仕事帰りの人は時間帯が合わない →大学生の活用（経済面が課題） ○指導者への報酬 ・ 指導者はほとんどが地域の方 ・ 専門指導者もある（合唱、琴、テニス、体操）	○部活動の連携 →部活動の指導者として入る →部員が少ない部活動の生徒がスポーツクラブに入る ○学校行事との連携 →運動会の自転車や会場の整理 ○20年続いている理由 →組織化されている（長短あるが緩い関係が作られにくい） ・ 年会費から保険を賄っているので安心感はある ○学校と地域がウインウインの関係 →子どもが関わっていることで子どもが大きくなった時に、地域の文化なりスポーツの豊かなまちになり、まちづくり、人づくりに長い目で見たときに貢献できれば知り合いが増え、防犯的にもいい

【子どもぶんか村】

より連携・協働するために何が必要か	連携・協働における障壁になっているものは何か	どんな連携・協働が考えられるのか
○先生たちとのコミュニケーション ・ 地域は常に学校と仲良くしたい →子どもの話がしたい（難しい親子に巡り合った際に先生たちはどう対応しているのかなど） →お茶を交え教育について語る、自分たちが持っているビジョンと先生の持っているものを伺いたい ○指導者の確保 →自分たちで探す →謝礼は1回3時間で2000円支払う →地区委員会の委託料では不足、子どもぶんか村基金をつくり募っている	○守秘義務（個人情報） ・ 地域が持っている情報と学校が持っている情報の共有 →子ども一人一人の幸せ、学校が楽しい地域が楽しい友達と生き生き過ごしてほしいと願い、そのためならどんなことでもしたいという人たちの集まりなのでいつか話せるチャンスが欲しい ○組織としては緩いため、学校と結びつくとその良さがなくなる可能性もあるのでは ・ 学校はもう少し開いてほしい ・ 距離が縮まらないのは多忙もあるし防衛感もあるのか ・ 土日が活動のため先生たちの関りは難しいのでは →だからこそ、普段の日に先生との話し合いが持てるといいのだが	○子どもぶんか村について ・ ぶんか村は3小学校1中学校の4校で活動している ・ 年に1回発表会（3月）があるため、子どもたちが実行委員会を作り発表会の企画運営を行っている ・ 活動は土日のみ（元は学校週5日制に伴い地域の受け皿としてスタート） ・ 運営は地区委員会の理事 ・ 組織化されても緩い関係 ○今後は校長が副校長にお願いしてみ

□資料4 実践的連携・協働に向けた活動計画案

団体名：校内居場所カフェ “ほっとカフェ”(仮称)

連携・協働先：区立中学校、学校運営委員会、主任児童員、行政、社会福祉協議会、大学など

実施期間：未定

目的：日常生活の中で、子どもがホッとできるひと時を過ごす場を地域の輪で創る

内容：(実践的連携・協働の具体的な内容を明記)

現在学校内で活動している地域活動を通して学校との信頼関係をつくる

この地域活動を通して、参加者、運営者等校内カフェに関心のある人とつながる

その中で話し合いを重ね、地域に合った活動スタイルを考え小規模にはじめる

スケジュール：(実施までの手順も含めて)

- 実施候補区立中学校校長訪問(ヒアリング)
- 実施候補区立中学校内での地域活動、報告等を通して、学校との信頼関係をつくる
- 活動参加者、賛同者の発掘
- 具体的にどのようなことをするか探究、話し合い
- 視察、見学
- 試行
- 振り返り
- 本格実施

留意点：(実践的連携・協働に向けて留意事項を明記)

- 実施検討中学校校長より（2023年9月19日訪問）

『校内カフェ』実施に向けた課題

- ・開催時間について 放課後実施については生徒の安全管理上難しい
- ・学校として地域に開き始めている段階 活動実績を作ってからが好ましい

学校と地域との関係性は地域差があり、現在、本校は地域との関係は活発とはいえない。

- ・子どもたちは利用するだろうか 地域性、価値観

- 実施候補学校内で行っていた地域活動は感染症流行により、一時休止。

その後、感染状況をみながら不定期に開催、9月に新規会員募集をして活動再開。

『校内カフェ』の計画案のスケジュールに照らし合わせると、現在は、学校との信頼関係づくり、参加対象となる子どもたちとの関係づくり、賛同者の発掘の段階。

備考：

団体名：オール世田谷おやじの会
連携・協働先：東深沢おやじの会、駒繫おやじの会
実施時期：7月～11月
実施会場：各小学校のイベント会場
目的：（実践的連携・協働の目的を明記） 地域ボランティア団体としておやじの会の活動が活発な様子を紹介し、できたらその活動の中で学校との連携の方法を紹介する。
内容：（実践的連携・協働の具体的な内容を明記） 各校のおやじの会イベントの打ち合わせ段階からイベントの様子までビデオ撮影し、イベントが成功するまでの流れ、各会員のかかわり度合いや活動の様子を紹介する。（子ども達起案、基点のイベントになるかはチャレンジ項目）
スケジュール：（実施までの手順も含めて明記） 11月までのおやじの会活動の中で、イベントの立ち上がりから過程を動画撮影し、NHK番組のプロジェクトX的な紹介動画を作成して、おやじの会団体の紹介動画とする。
留意点：（実践的連携・協働に向けて留意事項を明記） 各団体ともイベント動画は作成しているが、イベントの成り立ちから紹介する動画制作は初めてで、今回の様な動画制作の実績がない。 ただ、今回の提案に対して両者とも非常にポジティブな反応であり、彼らにとっても今後のおやじの会勧誘にも活用できるため、「自分たちにとって意義のある初めて試み」に対してビックリする様な成果が出てくる事が往々にしてあるので期待している。
備考：今後イベントスケジュール確認と作成過程をウォッチする予定。

団体名：東深沢スポーツ文化クラブ
連携・協働先：東深沢中学校
実施時期：10月の土曜日午後
実施会場：東深沢中学校食堂（ランチルーム）
目的：（実践的連携・協働の目的を明記）多世代交流と憩いの場の提供
内容：（実践的連携・協働の具体的な内容を明記） 東深沢スポーツ文化クラブによる学校使用外の土曜日の午後を活用したカフェの運営。
スケジュール：（実施までの手順も含めて明記） セキュリティ及び食品衛生上の課題もあるため、当面は、クラブ会員のみの参加に限定し、各自飲食物持ち寄りでの団らんの場とする。その後様子を見ながら、学校と相談しながら、中学生と地域住民の参加へとつなげていく。
留意点：（実践的連携・協働に向けて留意事項を明記） ・学校の教育活動に支障のないこと。 ・飲食を伴うため、衛生管理に努めること。 ・感染対策に努めること。 ・中学生の参画を進めること。
備考：

団体名：NPO法人世田谷ぶんか村PLACE
連携・協働先：区立船橋小学校、区立希望丘小学校
実施時期：2023年7月24日～8月31日
実施会場：各小学校
目的：（実践的連携・協働の目的を明記）地域の学習支援を学校と連携して進める
内容：（実践的連携・協働の具体的な内容を明記）青少年船橋地区委員会「子どもぶんか村」事業を20年間続けてきた実績から派生して、昨年NPO法人世田谷ぶんか村PLACEを設立した。その柱の一つである学習支援について、学校の担任の先生と意見交換しながら支援の実践に繋げていく。
スケジュール：（実施までの手順も含めて明記）希望丘小学校の学校長は4月から代わったので、「子どもぶんか村」と「NPO法人世田谷ぶんか村PLACE」の説明にうかがった。そこで、学習支援(PLACE FOR Me通称プレミ)の支援内容について担任の先生と話をしたいと申し出たところ快諾してくださった。担任の先生方は夏休み中が時間が取れるということなので、夏休みに話し合いをするように日程調整をした。保護者にはあらかじめ学校の担任の先生と情報交換をすることに許可をもらっている。全員の保護者から「ぜひ学校の先生と話してほしい」「学校と繋がって欲しい」という意向をいただいていた。船橋小学校は3月に一回、学級担任、学年主任、スマイル学級担任とプレミからも3人での話し合いはしている。希望丘小学校では初めて、プレミから4人と担任の先生ひとり、3人の先生方と話すことができた。夏休みにプレミですべき課題が整理された。船橋小学校は8月に行く予定。今後は定期的につけ、一人ひとりに合った支援を目指していく。
留意点：（実践的連携・協働に向けて留意事項を明記）話の内容は子どもの成績、その子が持っている特質や発達障害、それに対する親の理解度であったりと秘密を守らなければならないことが多い。先生方と話して一致していることも多かったが、見落としていた部分に気づくこともあった。聞き漏らさず秘密を守ることを留意点とした。
備考：プレミは、世田谷区の「子どもの学び場運営スタートアップ事業」から助成を受けて今年度で2年目となる。広報は一切しておらず子どもぶんか村が行っている事業「おやつステーション」で出会う中、気になる子どもに声かけしている。プレミはおやつステーションの後ろで、衝立で仕切ったスペースで週に2回程度行っており現在15人が登録している。ただし需要はもっとあるように感じている。講師は元教師2人、現役小学校講師2人、教員免許を持つお母さん、小学校学校支援員で構成している。

□資料5 会議の活動経過（第1回～第12回）

今期の活動経過は以下のとおりである。

- 第1回 令和4年6月28日
「委嘱状交付、諮問の検討、活動紹介」
- 第2回 令和4年8月4日
「グループワークⅠ～持続可能な活動とは～」
- 第3回 令和4年9月6日
「グループワークⅡ～持続可能な活動とは～」
- 第4回 令和4年10月6日
「グループワークの振り返り」
- 第5回 令和4年12月8日
「実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅰ～より連携・協働するためには何が必要か～①子ども食堂、②おやじの会」
- 第6回 令和5年1月16日
「実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅱ～より連携・協働するためには何が必要か～③総合型地域スポーツ・文化クラブ、④子どもぶんか村」
- 第7回 令和5年3月9日
「実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅲ～活動計画案作成①～」
- 第8回 令和5年5月23日
「実践的連携・協働に向けた活動計画Ⅳ～活動計画案作成②～」
- 第9回 令和5年9月27日
「実践的連携・協働活動の報告Ⅰ」
- 第10回 令和5年11月24日
「実践的連携・協働活動の報告Ⅱ」
- 第11回 令和6年2月16日
「活動報告書案の検討について」
- 第12回 令和6年3月25日
「活動報告書のまとめ」

□資料6 第30期社会教育委員の会議委員名簿

	氏 名	選 出 母 体 等	備 考
学校教育関係者	みねざし あつこ 峯岸 敦子	世田谷区立八幡小学校校長	新任
	おくだいら ゆうじ 奥平 雄二	世田谷区立玉川中学校校長	再任 2期目
社会教育関係者	とよだ としひろ 豊田 敏裕	世田谷区青少年委員会会長	新任
	むらかみ ゆみ 村上 由美	世田谷はぐくみプロジェクト代表	再任 3期目
	むらうち あつし 村内 敦	オール世田谷おやじの会会長	新任
	さとう みちこ 佐藤 三智子	青少年船橋地区委員会会長(子どもぶんか村)	新任
活動を行う者 向上に資する 家庭教育の	しんかい み き 新海 美紀	元世田谷区立中学校PTA連合協議会会長	再任 2期目
	やまざき つとむ 山崎 勉	世田谷区保護司会	再任 3期目
学識経験者	いのうえ たけし 井上 健	東京都市大学教授	新任
	ほりい まさみち 堀井 雅道	国士舘大学准教授	再任 2期目

任期：令和4年6月1日～令和6年5月31日